

浙江省一流学科A类建设项目

杭州师范大学“攀登工程”二期建设项目经费资助

基于话语模型理论的 中日韩指示词研究

談話モデルにおける
日中韓指示詞

郭玉英 著



浙江工商大学出版社
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS

浙江省一流学科 A 类建设项目

杭州师范大学“攀登工程”二期建设项目经费资助

基于话语模型理论的 中日韩指示词研究

郭玉英 著



浙江工商大学出版社
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

基于话语模型理论的中日韩指示词研究 / 郭玉英著.

— 杭州 : 浙江工商大学出版社, 2017.2

ISBN 978-7-5178-1863-2

I. ①基… II. ①郭… III. ①词语一对比研究—汉语、日语、朝鲜语 IV. ①H136 ②H363 ③H553

中国版本图书馆CIP数据核字(2016)第249732号

基于话语模型理论的中日韩指示词研究

郭玉英 著

责任编辑 姚媛

封面设计 林朦朦

责任印制 包建辉

出版发行 浙江工商大学出版社

(杭州市教工路198号 邮政编码310012)

(E-mail: zjgsupress@163.com)

电话: 0571-88904970, 88831806 (传真)

排版 杭州雅索斋文化创意有限公司

印刷 杭州恒力通印务有限公司

开本 800mm×1230mm 1/32

印张 8.125

字数 210千

版次 2017年2月第1版 2017年2月第1次印刷

书号 ISBN 978-7-5178-1863-2

定价 28.00元

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江工商大学出版社营销部邮购电话 0571-88904970

目次

序 論 / 001

第1部 日本語指示詞

第1章 指示詞研究の概観

1.1 人称区分説 / 006

1.1.1 佐久間：距離区分説から人称区分説へ / 006

1.1.2 三上：楕円的対立と円的対立 / 008

1.1.3 久野：聞き手の知識 / 010

1.2 人称区分説への批判 / 012

1.2.1 堀口：聞き手の消去 / 012

1.2.2 黒田：話し手のみの知識 / 013

1.3 距離区分説と人称区分説の折衷案 / 015

1.3.1 阪田：「われわれ」領域 / 016

1.3.2 李：「対立型」と「融合型」 / 017

1.4 知識モデル / 019

1.4.1 Yoshimoto：階層的モデル / 019

1.4.2 金水・田窪など：談話管理理論 / 023

1.4.3 東郷：談話モデル / 026

1.5 まとめ / 029

第2章 本研究の理論的枠組み

2.1 「談話」と理論背景 / 031

2.1.1 メンタル・スペース理論 / 031

2.1.2 談話管理理論 / 033

2.2 本研究の仮説 / 035

2.3 指示詞用法の分類 / 039

第3章 現場指示用法

3.1 先行研究とその問題点 / 040

3.1.1 「距離区分説」と「人称区分説」 / 040

3.1.2 「対立型」と「融合型」 / 043

3.2 本研究の立場 / 045

3.2.1 現場指示の談話モデル / 045

3.2.2 発話現場の分割 / 046

3.3 絶対時間と空間を表す現場指示 / 051

3.3.1 先行研究 / 052

3.3.2 絶対空間を表す現場指示 / 053

3.3.3 絶対時間を表す現場指示 / 055

3.4 指示詞の決定要因 / 056

3.4.1 物理的距離 / 056

3.4.2 コントロール・直接接触 / 057

- 3.4.3 操作可能性・行為の主体性 / 059
- 3.4.4 所有・所属関係 / 060
- 3.5 まとめ / 060

第4章 文脈指示用法

- 4.1 先行研究とその問題点 / 062
 - 4.1.1 コ系—ソ系 / 062
 - 4.1.2 ソ系—ア系 / 068
 - 4.1.3 まとめ / 073
- 4.2 本研究の立場 / 073
 - 4.2.1 ソ系指示詞の談話モデル / 075
 - 4.2.2 コ系指示詞の談話モデル / 085
 - 4.2.3 ア系指示詞の談話モデル / 097
- 4.3 独話における「コ・ソ・ア」 / 108
 - 4.3.1 照応指示のソ / 108
 - 4.3.2 観念指示のコ / 109
 - 4.3.3 観念指示のア / 111
- 4.4 本章のまとめ / 112

第5章 現場指示と文脈指示の統一的分析

- 5.1 問題提起 / 115

5.2 談話モデル / 116

5.2.1 現場指示用法 / 116

5.2.2 文脈指示用法 / 117

5.3 両用法の統一的分析 / 119

5.3.1 コ系指示詞 / 119

5.3.2 ア系指示詞 / 120

5.3.3 ソ系指示詞 / 121

5.4 まとめ / 125

第2部 指示詞の対照研究

第6章 日中指示詞の対照研究

6.1 はじめに / 128

6.2 現場指示用法 / 129

6.2.1 先行研究とその問題点 / 129

6.2.2 本研究の立場 / 134

6.2.3 まとめ / 151

6.3 文脈指示用法 / 152

6.3.1 先行研究とその問題点 / 152

6.3.2 本研究の立場—談話モデル / 157

6.3.3 まとめ / 175

6.4 本章のまとめ / 177

第7章 日韓指示詞の対照研究

7.1 はじめに / 179

7.2 現場指示用法 / 180

7.2.1 先行研究とその問題点 / 180

7.2.2 発話現場の分割 / 186

7.2.3 絶対空間と時間を表す現場指示 / 193

7.2.4 個人領域の決定要因 / 195

7.2.5 まとめ / 201

7.3 文脈指示用法 / 203

7.3.1 先行研究とその問題点 / 203

7.3.2 本研究の立場 / 206

7.3.3 独話における韓国語指示詞 / 220

7.3.4 まとめ / 224

7.4 本章のまとめ / 226

第8章 結 論

8.1 本研究のまとめ / 228

8.1.1 日本語指示詞 / 228

8.1.2 指示詞の対照研究 / 233

8.2 本研究の意義と今後の課題 / 239

参考文献 /240

用例の出典 /247

謝 辞 /249

序 論

1. 研究動機と目的

本研究は、日本語・中国語・韓国語の指示詞を研究対象とし、一連の談話での指示詞の現場指示用法と文脈指示用法を比較対照したものである。

しばしば指摘されるように、日本語は高文脈言語 (High Context Language) であり、話し手は聞き手や周囲の状況、前後の文脈を考慮せずに、敬語やモダリティ、代名詞などを使うことはできない。そのような、発話状況や文脈に依存する表現のひとつに指示詞がある。日本語の指示詞研究は、古くから国語学、日本語学の分野において多大な関心が持たれており、それに関わる論文も多数存在している。しかしその多くが現場指示と文脈指示のいずれかを中心とする研究であり、両用法を統一的に説明しようとする研究はほとんど見られない。本研究では、日本語の指示詞の体系を記述するにあたって、自然で普遍性のある原則や制約を談話モデルと組み合わせることにより、細部まで説明できるような構造を持たせることを目的とする。

さらに、そのモデルに基づき、日本語と同様の指示体系をなす韓国語、及び異なる指示体系をなす中国語 (表 1) との比較対照研究を行い、各言語の相違点を分析し、ダイクシスの特性を探りたい。

表 1 日中韓三言語の指示詞

	日	韓	中
近	コ	이 (i)	这 (zhe)
中	ソ	그 (ku)	—
遠	ア	저 (Ce)	那 (na)

2. 理論上の枠組み

指示詞の分析は、伝統的に「現場指示(眼前指示)」と「文脈指示」に分けて行われることが多い。詳細は次章以降に譲るが、「現場指示」とは、話し手と聞き手が同一の場にいるとき、その場に存在する事物を指示する用法であり、「文脈指示」とは、対話や文章、内言・独白などにおいて、自分や相手が発した言語表現を指示の対象にする用法である。

本論文では、金水・田窪や東郷の談話管理理論を批判的に検討した上で、それらの理論を発展させ、上記の各用法に見られる原理の共通点と相違点を明らかにしたい。また、上の考察に基づいて3項指示詞体系を持つ韓国語と2項指示詞体系を持つ中国語の特徴との対応関係を検討する。

3. 研究方法

＜理論的な方法＞

日本語、中国語と韓国語という三つの言語を分析対象とすることから、対照言語学的方法を用いる。すなわち、基本となる言語と対象言語を対照することによってその目標言語の特徴を明らかにするという対照分析の手法をとる。まず、日本語を基本言語として、その指示詞の用法について詳細に検討する。ついで、その知見に基づいて対象言語である中国語と韓国語の指示詞を日本語の指示詞と個別に比較し分析を行う。

＜実証的な方法＞

日本語・中国語・韓国語それぞれの言語における指示詞の共通点や相違点を明確に分析するため、以下の方法で用例を収集した。

- 1) 日中韓の平行・テキスト(文学作品や新聞記事など)

2) 自然談話

3) 母語話者によるインフォーマント・チェック

まず、三言語の指示詞の対応関係と相違点を明確に捉えるため、文学作品など日中韓のパラレル・テキストから基本データを抽出する。しかし、日常の会話で用いられる指示詞と文章語に見られる指示詞では、使われ方にズレが見られることがあるので、母語話者によるインフォーマント・チェックや自然談話の録音などによるデータの分析も行う。

4. 本書の構成

本書は「序論」「本論」「結論」に分け、本論は二部、全7章で構成される。

序論では、研究の目的、理論上の枠組みと研究方法、本書の構成について述べた。

第一部では、日本語指示詞を扱う。

第1章では、日本語指示詞の研究を概観する。第2章では日本語指示詞の先行研究を踏まえて、本研究における理論的枠組を述べる。第3章では、日本語指示詞の現場指示用法について考察する。そして、第4章では、文脈指示用法に関する先行研究を批判的に検討した上で、実例を挙げながら、談話モデルでの解析を行う。最後に第5章では、両用法の統一的分析を試みる。

第二部では、日本語と中国語・韓国語の指示詞の対照研究を行う。

第6章では、日本語と中国語の指示詞の対照研究を行う。第7章では、日本語と韓国語の指示詞の対照研究を行う。

最後に結論では、日中韓三言語の指示詞の相違点をまとめ、今後の残された課題について考える。

論 學 風

（附錄）

夫學風者，一國之精神所繫也。其盛衰興廢，足以觀其國之文明與否。故君子必先慎乎學風，而後可以立於天下。

夫學風之興，由於人心之正。人心正則學風興，學風興則國體立。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之衰，由於人心之邪。人心邪則學風衰，學風衰則國體廢。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之盛，由於人心之公。人心公則學風盛，學風盛則國體立。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之衰，由於人心之私。人心私則學風衰，學風衰則國體廢。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之盛，由於人心之公。人心公則學風盛，學風盛則國體立。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之衰，由於人心之私。人心私則學風衰，學風衰則國體廢。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之盛，由於人心之公。人心公則學風盛，學風盛則國體立。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之衰，由於人心之私。人心私則學風衰，學風衰則國體廢。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之盛，由於人心之公。人心公則學風盛，學風盛則國體立。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之衰，由於人心之私。人心私則學風衰，學風衰則國體廢。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之盛，由於人心之公。人心公則學風盛，學風盛則國體立。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

夫學風之衰，由於人心之私。人心私則學風衰，學風衰則國體廢。故君子必先正其心，而後可以興其學風。

第1部

日本語指示詞

第1章 指示詞研究の概観

序論で述べたとおり、対照分析はいずれかの言語の視点に立って行わなければならない。この論文では、日本語指示詞の詳細な分析を行った上で、日本語の視点に立って中国語と韓国語の指示詞と対照し、その異同を探ることが目的である。そのために、まず本章では、日本語指示詞のコ・ソ・アについて、その主な研究を概観する。

ここでは先行研究を、(i) 一人称と二人称の関係に対応とする説、(ii) 談話の「場」と会話参加者の知識による認知論的アプローチ、の二つに分けて、両者を批判的に検討していきたい。1.1節では佐久間、三上、久野による人称区分説を、1.2節ではそれに対する反論として、話し手の領域を重視する堀口と黒田の仮説を、1.3節では距離区分説と人称区分説の折衷案を、そして1.4節で認知論的知識モデルを取り上げる。最後に1.5節でまとめとして本研究の課題を述べる。

1.1 人称区分説

日本語指示詞のコ・ソ・ア三系列の使い分けを、単に近中遠といった話者と対象との空間的、時間的または心理的な距離の差異という要因に帰する「距離区分説」は、話し手および聞き手と指示対象との相対関係に依存するという「人称区分説」によって否定されたと言ってよい。後者の論は主に佐久間、三上、久野らによって説かれたものである。

1.1.1 佐久間：距離区分説から人称区分説へ

指示詞の研究史というと、佐久間鼎の研究（佐久間 1936/1951

『現代日本語の表現と語法』から語り始めるのがほぼ常識となっている。その最大の発見として、品詞分類を超えた指示詞のパラダイムの存在を見出したことと、ソを聞き手領域を指示するものと規定したことの二点が挙げられることが多い。

佐久間は本来距離的な区分として与えられた「近称（コ系）・中称（ソ系）・遠称（ア系）」を批判して、「かのいわゆる近称・中称・遠称の差別は、この自称・対称・他称という、対話の場における対立関係に対して、内面的な交渉をもつ」とし、次のように規定している。

「これ」という場合の物や事は、発言者・話手の手のとどく範囲、いわばその勢力圏内にあるもののなのです。また、「それ」は、話し相手の手のとどく範囲、自由に取れる区域内のものをさすのです。こうした勢力圏外にあるものが、すべて「あれ」に属します。

（佐久間 1951:22）

しかし、佐久間の人称区分説において問題になるのは、現場指示用法と文脈指示用法の関連である。この点については、次のように述べている。

話の進行の中では、「それ」とか「その」とか「そこで」とか「その時」とか、いう文句がよく使われますが、これは、対話の際相手のいう事をこういう語でさすのと、同趣のものと思います。

（中略）

もちろん、前に述べた事柄や品物を指すのに「それ・その」などを用いる場合は、たくさんありますので、話

し相手だけに限ることは出来ませんが、こういう場合に、ある程度までは「これ・この」などでさすことも出来るようです。しかし大体、眼前の事象をさして「これ・この」を用いるに対し、話された事件などで現に相手との間に話題になっている場合には、「それ・その」でさすのが普通で、また自然でしょう。

(佐久間 1951:24)

ここで、現場指示用法と文脈指示用法の区別があるということを示唆していると読むことは可能だが、結局文脈指示を「現に相手との間に話題になっている」という理由でソ系列の用法に帰している。このように、指示詞の文脈指示は、見出されると同時に新たな問題の焦点になったといえる。

1.1.2 三上：橢圓的対立と円的対立

三上(1970)は「人称区分説」において区別されていなかった「直接指示(deictic)」と「文脈承前(anaphoric)」という区別を導入し、「人称区分説」だけではなく「距離区分説」をも取り込んで、一貫した指示詞の体系を打ち立てた。

三上は、直接指示用法におけるコレ・ソレ・アレは、「同一平面を同時的に分割」する triplet な対立(三項対立)ではなく、①コレ対ソレと、②コレ対アレからなる「異質的な」double binary の対立(二項対立)であると主張した。三上によれば、①のコレ対ソレは橢圓的対立、すなわち「相手と話し手との原始的な対立」をなしており、この段階ではアレはまだ現れてこない。一方、②のコレ対アレは円的対立、すなわち、相手と話し手とが「肩を並べ(…)『我々』として『ぐる』」になっていて、「相手自身は消えることはないが、『ソレ』の領分は没収」されてしまう